

ライプニッツ『人間知性新論』再考 仏語版『人間知性論』の介在

Leibniz's 'New Essays on Human Understanding': An imaginary dialogue through the medium of the French version of 'An Essay concerning Human Understanding.'

福島清紀

FUKUSHIMA Kiyonori

1. はじめに

ライプニッツがジョン・ロックの『人間知性論』(*An Essay concerning Human Understanding*, 1690) の思想内容に深く接したのは、ピエール・コスト(1668-1747) の仏訳初版(*Essai philosophique concernant l'entendement humain*, 1700) を通してである。しかも、哲学の分野ではラテン語が共通語の地位をフランス語に譲りつつある状況のなかで、ライプニッツはロック哲学に対する批評をフランス語で書くのが賢明であると考え、コスト訳に依拠して対話体の書『人間知性新論』(*Nouveaux essais sur l'entendement humain*) を執筆した⁽¹⁾。実際、アカデミー版ライプニッツ著作集に徴する限り、ロックの代弁者フィラレートの発言の大部分はコスト訳の抜粋である。このようにライプニッツと『知性論』との間にはコスト訳が介在しており、そのことが、『知性新論』に独特の性格を刻印している。

ピエール・コストは南仏セヴェヌ地方の町ユゼスに生まれ、牧師を志してジュネーヴ大学に進む。だが、ルイ14世による「ナントの勅令」廃止(1685) を機に、プロテスタントに対する弾圧が強化されたため、亡命を余儀なくされた。「カトリック一色のフランス(*La France toute catholique*)」(ピエール・ベール) を追われてスイスやオランダの大学を転々としたのち、アムステルダムで牧師補に任ぜられ、さらにある印刷所の校正係を経て、97年に渡英、オーツのマシャム家の家庭教師となる。マシャム夫人 ケンブリッジのプラトン主義者レイフ・カドワースの娘ダマリスは、ロックのかつての恋人である。ロックはすでにイギリスの学界の中心人物であったが、ロンドンを離れてマシャム邸で晩年を過ごしていた。マシャム邸をしばしば訪れた人々の中にはニュートン、シャフツベリー、サミュエル・クラークなどがいた。夫人は父のサークルとロックのサークルを結びつける役割を果たすことになる。活発な思想交流の場を得たコストは、とりわけロックの著作の翻訳を通じて、イギリス思想の大陸への普及に大きく貢献した⁽²⁾。コストは『知性論』の翻訳に先立って、ロックの『教育に関する若干の考察』(*Some Thoughts concerning Education*, 1695) と『キリスト教の合理性』(*The Reasonableness of Christianity*, 1696) を翻訳している⁽³⁾。ポール・アザールが指摘しているように、「ナント勅令廃止の思いがけない結果のひとつは、とにかくイギリスが一群の仲介者を手にいれたこと、それによりイギリスの作品の普及とイギリスの勢威の拡大がいちじるしく速まったこと」であった⁽⁴⁾。

『知性新論』がほぼ出来上がる頃には、マシャム夫人とライプニッツとの文通が始まり、予定調和説を中心とする哲学的諸問題が論じられた⁽⁵⁾。また、コストとライプニッツの間にも交流が生まれ、ライプニッツがロック批評を書いていることを知ったコストは、その批評が公平さを欠いたものにならぬようにとの配慮から、『知性論』仏訳初版の訂正箇所をライプニッツに送っている⁽⁶⁾。

『知性論』のコスト訳はロック自身の校閲を経たものであり⁽⁷⁾、版を重ね、権威ある翻訳として読まれた。たとえば、コンディヤックの『人間認識起源論』(*Essai sur l'origine des connaissances humaines*, 1746)には『知性論』からの数多くの引用が見られるが、『知性新論』と同様、それらの引用はコスト訳に依拠したものである。英語を解さぬコンディヤック⁽⁸⁾が『知性論』に対する応答の書を著わそうとすれば、仏訳の存在意義はいかばかりであったか、想像に難くない。「1700年に私が出した仏訳によって『知性論』はオランダ、フランス、イタリア、ドイツにも知られ、イギリスにおいてもこれらの国々でもおしなべて高い評価を受けてきた」⁽⁹⁾。コストが仏訳第2版(1729)の冒頭に記した一節である。この表現もいちがいに誇張とは言えまい。『知性論』の仏訳の刊行は、『知性論』に対する大陸からの応答を引き出す決定的な契機となったという意味で、当代西欧の思想的動向を画する出来事のひとつであった。

イギリスのロック、フランスからの亡命者コスト、ドイツのライプニッツ。彼らは確かに17世紀末西欧の文芸共同体に生きていた。科学的研究とその研究成果の相互伝達を促進するための公共機関の設立、宗教的不寛容と政治的権謀術数が渦巻くなかでの教会統合計画の立案等々、ライプニッツの八面六臂の活動に照らしてみるだけでも、同時代的連関網のありようを窺い知ることができよう。だが、そうした同時代的連関網は、各々の営為を個別に方向づけていた思想的ベクトルと交錯している。以下、その点を具体例に即して解明してみよう。

2. 英語の *consciousness* と仏語の *conscience*

17世紀末西欧の文芸共同体について、クシシトフ・ポミアンは次のように述べている。「ユグノーの学者、企業家、銀行家、軍人たちは、亡命先のエリートにとけこみ、彼らにフランス語とフランス文化や、パリで起こることへの好奇心をもたらした。他方、ユグノーの編集者や出版業者は、とりわけネーデルラントを起点として、ヨーロッパ規模での書物と定期刊行物の販売網を創設した。彼らは素早く上手に印刷し、ほかのどこでも刊行されえないような文献を出版した。こうして彼らは、「文芸共和国」に基盤を与え、フランス語をヨーロッパのエリートの国際語にしたのである。」⁽¹⁰⁾コストや、コストをロックに紹介した『古今東西文庫』(*Bibliothèque universelle et historique*, 1686-93)の編集者ジャン・ル・クレールは、こうした文芸共同体を構成する「ユグノー」であった。この『文庫』は、ベールが1684年に発刊した『学芸共同体通信』(*Nouvelle de la république des lettres*)やパナージュ・ドゥ・ボヴァルがそれを引き継ぐかたちで1687年から1709年まで発行した『學術著作史』(*Histoire des ouvrages des savants*)とともに、全ヨーロッパ的な読者層をねらってオランダで刊行されたフランス語の雑誌である⁽¹¹⁾。

『知性論』の初版が出版されたのは1690年であるが、これに先立って、ロックはオランダ亡命中の1687年にその「梗概」を書いている。ロックの友人ル・クレールがそれを仏訳し、『古今東西文庫』第8巻(1688年1月)に掲載した。その翻訳にまつわる事情の一端をル・クレールはこう語っている。「読者はこのフランス語訳の中に、新しい意味で用いられている語、もしくはいかなるフランス語の本でもおそらく目にしたことのない語がいくつかあることに気づくかもしれない。しかし、それらの語を迂言法で表現すると長くなりすぎたであろう。それに哲学の分野では、このような場合、他のすべての言語においてと同様に我々の言語においても、自由に振舞うことが許されていると考えた。それはつまり、必要としている言葉を一般の用語法が提供してくれなければ、アナロジーに基づいて言葉を作るということである。」⁽¹²⁾ル・クレールの語る事情は、コストにとっても決して無縁ではなかった。

コストが『知性論』の仏訳に際して遭遇した障害のひとつに、ロックの革新的な用語法がある。ロックは『知性論』第2部27章(「同一性と差異性について」)9節で、人間が人格的に同一であるゆえんを「意識(*consciousness*)」に帰した。英語には17世紀前半から *conscience* と *consciousness* の二つの言葉があり、後者の *consciousness* は、やがてカドワースやロックによって反省的な知覚を意味する認識論的術語として用いられるようになる。そうした背景をもつ上述箇所の *consciousness* をコストは *con-science* と仏訳した。フランス

語の conscience は「良心」という道徳的意味を色濃く帯びていたからであろう、コストはイタリック体とハイフンを用いて言葉の新しい用法を強調し、さらには長い脚注で訳語の選定について釈明するなど、最大限の工夫を施した⁽¹³⁾。その注でコストは、「哲学的な言説においては、その著者の思想を表現する要を得た言葉がないとすれば、新しい言葉もしくは使われなくなった言葉を使ってよだけでなく、また使わなければならない」と記している⁽¹⁴⁾。

しかし、フランス語の conscience を道徳的意味とは異なる新しい意味で用いた人物はすでにいた。たとえば、『真理の探求』(*De la recherche de la vérité*, 1674) の著者マルブランシュである。マルブランシュは同書第3巻第2部7章で、「事物を見る四つの仕方 (*Quatre manières de voir les choses*)」の一つとして、「意識によって、すなわち内的感覚によって認識する (*connaître par conscience, ou par sentiment intérieur*)」ことを挙げる⁽¹⁵⁾。この表現を、実はロックが『万物を神の内に見るといふマルブランシュ師の見解の検討』(1693)の中で、『by consciousness or by interior sentiment』とパラフレーズしていた⁽¹⁶⁾。コストは、そのロックの目の届くところで『知性論』を仏訳したはずであるが、仏訳初版の訳注では、consciousness の訳語選定に関して、ジュネーヴで出版された仏語版聖書の一節(「コリントの信徒への手紙、第一」Ⅷ・7)への言及は見られるものの⁽¹⁷⁾、なぜかマルブランシュの名も彼の著作からの引用も見当たらない。疑問は残るが、1729年にコスト訳の第二版が出版されるまでには、コストはマルブランシュの用法を知ったとみえて、第二版の該当箇所の訳注では件の聖書への言及を削除し、自分の訳語選定を正当化するための拠り所として、『真理の探求』における conscience の用法を引いている。ロックの『検討』は1706年刊行の遺稿集に収められており、コストはこれによってマルブランシュの用法に注目したのかもしれない⁽¹⁸⁾。

ところで、『知性論』での consciousness の初出箇所は第2部27章9節ではなく、第1部4章20節である。この語は第2部1章11節、19節でも使われているが、19節の consciousness の定義 《Consciousness is the perception of what passes in a man's own mind.》⁽¹⁹⁾ を含めて、コストはいずれの場合も conscience を当てることはせず、『persuasion ou l'on est intérieurement』や『sentiment intérieur』等の迂言法を用いて困難を巧みに避けていた。しかし、パルマンティエによれば、第2部27章はもはや妥協策を許さない。そこでは consciousness は、人格性という回避できない新たなカテゴリーの基礎として現れているからである⁽²⁰⁾。第2部27章の consciousness を前にしたコストの困惑もそこにあった。

新しい術語の使用という点で、当代のイギリスとフランスはまったく異なった基盤をもっていた。イギリスでは、学問で用いられる言語は王立協会の活動に促されてきわめて流動的な状態にあり、才人とか学者の言語より先に職人や商人の言語が好まれた。一般に変化は、イギリスでは歓迎され、フランスでは顰蹙を買った⁽²¹⁾。確かに、フランス語を母語とする哲学者たちのなかには、時代の変化を感じとり、新たな語彙の必要性を説く者もいた。ベールは『歴史批評辞典』(*Dictionnaire historique et critique*, 1695-97) でフランス語の貧困さを指摘し、ポール・ロワイヤルのニコルやアルノーも造語の使用を擁護する。しかし、フランス語は完成の極みに達しているとする保守層の抵抗は根強く、新しい術語に疑念を抱く態度は18世紀まで残存する⁽²²⁾。

では、ライプニッツの場合はどうか。「三十年戦争」がドイツにもたらした物心両面にわたる後進的状況のゆえに、母語による著述を受け入れる基盤そのものが英仏に比して未成熟であり、学問研究の成果を公表するにも吸収するにも、主としてラテン語かフランス語に頼らざるをえなかった。そうした不利な条件を背負いながらも、ライプニッツは先行諸思想を実に貪欲に吸収しようとする。『真理の探求』の著者とも文通を重ね、80年代の終わりには『宇宙の真の知的体系』(*The True Intellectual System of the Universe*, 1678) の写しを見る機会も得た⁽²³⁾。

ライプニッツはパリでマルブランシュの知遇を得て、1676年から98年にかけて文通した。この文通はさらに1711年まで断続的に続く。ライプニッツはマルブランシュやその信奉者たちの著作の写しを丹念に読み、注釈もつけた。「内的感覚」としての「意識」は、ライプニッツの注意をとくに喚起した概念であった⁽²⁴⁾。パリ滞

在中の1675年に初めて『真理の探求』を読んだライプニッツは、10年後ハノーファーでこの著作を再読して詳細な注釈を書き、1690年までには、conscienceの用法 われわれがconscienceによって魂についてもつ認識は、真ではあるが不完全 も含めて、マルブランシュの思想の内容と用語法に精通していたのである⁽²⁵⁾。

カドワースは『宇宙の真の知的体系』で「形成的自然(plastic nature)」の概念を導入し、同時代の強力な思想潮流と目される無神論を論駁しようとする。カドワースの見るところでは、とくにホッブズによって代表される無神論的な原子論は、原子的な粒子だけを想定して物質の諸特性を説明しようとする立場であり、自然界に秩序と方向づけがあることを否定するものであるが、「神は直接的あるいは恒常的に世界に干渉するわけではないので、自然が連続的に示す秩序と合理性を説明するためには、二次的な原因すなわち形成的自然がなければならない」⁽²⁶⁾。こうして神の従属的代行者として技巧的・規則的に働く「形成的自然」が想定される⁽²⁷⁾。

カドワースは『知的体系』第3章37節15で、「形成的自然」において観察される不完全性の一つとして、「形成的自然はそれ自身の行動の理由を把握していないので、自らの為すことを明晰にはっきりと意識してもない」ことを挙げて、「この点で形成的自然は人間の技術に及ばないばかりか、動物自身の内にある行動の仕方にさえ及ばない」と言う。「動物は自らの自然的本能に基づく行動の理由を理解してはいないが、それでも行動を意識し想像力によって行動すると一般に考えられる。それに対して、形成的自然は動植物の形成において、その為すことについて動物的な想像力、明白なシュンアイステシス、『共感覚』ないし『意識』(express συναίσθησις, “con-sense” or “consciousness”)をまったく具えていないように見える。」⁽²⁸⁾カドワースはこのように『知的体系』で時折consciousnessをsynaesthesiaやcon-senseと並置し、なおかつcon-senseとconsciousnessにも引用符を付けている。『知的体系』が出版されたのは1678年であるが、出版の許可は1671年に出されていた。1670年代の初めにカドワースがこの著作を書いているとき、consciousnessは口からすら出でてくる言葉ではなかった。デイヴィーズは、時折使われる引用符がそのことを暗に物語っていると指摘する。カドワースは「形成的自然」の理論を、同時代のレギウス、ファン・ヘルモント、ヘンリー・モアだけでなく、ルネサンス期の新プラトン主義者とも共有しており、カドワースの新プラトン主義的な語彙は、マルシリオ・フィチーノによるプロティノスの『エンネアデス』(Enneades)の翻訳(初版は1492年にフィレンツェで出版)を踏襲したものであった。con-senseは、ギリシャ語原典で使われているsynaesthesiaをフィチーノが訳すのに用いたconsensusやconsensioの痕跡を留めている。con-sense、con-sensus、synaesthesiaは《感覚》とのつながりを暗示しているけれども、これに対してconsciousnessは、プロティノスの学説でしばしばsynaesthesiaと並置されるギリシャ語のsynesisや《認識》という概念により近い類縁関係がある。フィチーノはsynesisをcogitatio、notitia、conscientia、cognitioというように様々に翻訳し、カドワースはそれをconscious perceptionとかconsciousnessと呼ぶ。con-senseはOEDでは「臨時語(nonce-word)」と記述されており⁽²⁹⁾、日常語としては残らなかったが、consciousnessは英語の日常的な語彙の一つとして定着し、きわめて重要な哲学的概念を意味するようになったのである⁽³⁰⁾。

このようにカドワースやロックが先鞭をつけたconsciousnessの哲学的用法と、consciousnessに相当するフランス語のconscienceの新しい用法は、ライプニッツにとって決して疎遠なものではなかった。『形而上学叙説』(Discours de la métaphysique, 1686)はconscienceという術語を用いてはいないが、ライプニッツのアルノー宛書簡は「思考」や「記憶」などとの関連でconscienceへの言及を含んでいる⁽³¹⁾。ライプニッツは、1687年10月9日付のアルノー宛書簡で、人間の魂は「一における多の表現」の一例であると主張し、これに付け加えて、「しかしこの表現は理性的魂においては意識が伴っており、表現が思考と呼ばれるのはそのようなときなので」と言い、能動的な自己意識ないし自己反省の能力を躊躇なくconscienceと呼ぶ⁽³²⁾。そして同じ書簡で、「われわれが思考を認識するのは(マルブランシュ師がすでに指摘したように)内的感覚によってでしかありません」とも述べている⁽³³⁾。

ライプニッツはロックの使うconsciousness(コスト訳のcon-science)を、『知性新論』の該当箇所です。

ク体もハイフンも使わずに conscience と表記し、そのあとに英語の consciousness と自分の造語 consciosité を併記して付け加えている³⁴⁾。デイヴィーズは、consciosité という語は présiosité や curiosité などとのアナロジーに基づくものであろうと言う³⁵⁾。「必要としている言葉を一般の用語法が提供してくれなければ、アナロジーに基づいて言葉を作る」というル・クレールの方式をライプニッツも実践したと言えるかもしれない。ところが、ライプニッツが「序文」以外の修正作業を委ねたアカデミー・フランセーズの会員アルフォンス・デ・ヴィニョル³⁶⁾は、このライプニッツの造語に嘖みついた。ヴィニョルは、少なくとも自国で使われる術語として consciosité を認めるフランス人は皆無だろうと指摘する。ヴィニョルの感覚では、conscience というフランス語でさえ consciousness に対応するものではなかった³⁷⁾。ライプニッツは造語の consciosité の使用をやめて conscience を使うようにはなるが、『知性新論』では時として consciosité を使い³⁸⁾、もっとぎこちない conscienciosité という別形も使う³⁹⁾。ヴィニョルから不適切との指摘を受けたにもかかわらず、またフランス語の conscience の新しい用法に精通していたにもかかわらず、ライプニッツは個体存在の内的作用の析出において、ある意味で独自の発想を貫いたのである。このことは、ライプニッツの思考実験およびその成果としての理論構成の特質を暗示しているという意味で、きわめて注目に値する⁴⁰⁾。

3. mind の仏訳をめぐる

『知性新論』には「意識」概念をめぐるそうした交錯が読み取れる⁴¹⁾。けれども、これはほんの一断面にすぎない。『知性論』にコスト訳と『知性新論』を重ねてみると、『知性論』で使われている mind についても興味深い問題が潜んでいる。

たとえば、『知性新論』第1部1章5節でフィラレートは、「もし何らかの個別的命題が生得的だと言えるなら、それと同じ理由で、合理的な命題や精神が合理的とみなしうる命題はすべて、魂のなかにすでに刻まれていると主張しうる」⁴²⁾と述べている。ここに言う「精神(esprit)」と「魂(âme)」は、『知性論』ではいずれも mind である。ライプニッツはコスト訳を踏襲しており、コスト訳の âme ないし esprit を通して『知性論』の mind に接していたことになるが、コストによる訳語の使い分けの理由は定かではなく、二つの訳語は同義語として使われているように見える。

コストは、mind だけでなく soul をも âme と訳し、また mind と spirit の両方を esprit とも訳した⁴³⁾。とくに mind と soul について言えば、『知性論』における使用頻度の点では、mind の方が soul よりも圧倒的に多いが、人間の内的作用について記述する場合、両者がさほど厳密に区別されているとも思えない。ロックが反対する特定の論者の主張を検討するときには、当の主張に即して soul を使うことが多い。そういう mind も soul もコストは esprit か âme と訳している。しかもコスト訳の esprit は『知性論』では understanding であったりする。ロックが understanding と mind をしばしば互換的に用いているからかもしれない。

J.W. ヨルトンの指摘によれば、『知性論』において、mind は understanding よりも多くの機能を付与されているけれども、mind も understanding も観念と思考をもち、作用において能動的である。両者の明確な区別を『知性論』から引き出すことは難しいであろう。時として understanding は mind の能力であるが、常にそうだというわけではない。understanding が mind と互換的に用いられることがより頻繁である。「観念」は通常、mind の中に位置を占めており、拡張し抽象し考察し推論し結論を出すのは mind であるが、understanding もまたある場合には同じ働きを割り当てられる。ロックの興味は、「感覚し知覚し思考し意志することにおける mind の働きを記述すること」にあり、「そうした心理学的記述のための確定的な語彙は欠けていた」⁴⁴⁾。「事象記述の平明な方法(historical plain method)」を旨とする『知性論』に用語法の体系的な一貫性を期待するのは当を得たことではあるまいが、フランス語の語彙では正確に対応しえないロックの発想は、その用語法の揺れと相俟ってコストを悩ませたはずである。

さて、âme にしても esprit にしても、それぞれ多義性をもつ言葉ではあったが、リシュレの『フランス語辞

典』(1680)は *âme* の項でも *esprit* の項でも「思考する実体(Substance qui pense)」と記述し⁽⁴⁵⁾、フルティエールの『汎用辞典』(1727)と『アカデミー・フランセーズ辞典』(1694)は、*esprit*の説明を「生ける非物的実体(Substance vivante & incorporelle)」という記述で始めている⁽⁴⁶⁾。これらの記述は、言葉の哲学的用法の全貌を解き明かすものとは言えないにせよ、*âme* と *esprit* を同義語として使うかぎり、これらの語が「実体」を含意していたことを物語る。

コストによる *mind* の訳語選定を規定していた思想的基盤についてさらに言えば、想定可能と思われるのはデカルトの用語法である。*esprit* はラテン語では *mens*、*âme* は *anima* であった。

デカルトは『省察』の「第五答弁」で次のように述べている。「おそらく最初の人間たちはわれわれのうちに、われわれがそれによって栄養をとり、生長するところの、またわれわれと動物とに共通なその他すべてのものをいかなる思惟をも伴わずにわれわれが遂行するところのかの原理を、われわれがそれによって思惟するところの原理から区別はしなかったでしょうから、そのいずれをも唯一の靈魂(*anima*)という名称でもって称したのです。そしてその後、思惟[作用]が栄養作用とは区別されることに気づいた者が、思惟するところのものを精神(*mens*)と呼び、そしてこの精神が靈魂の主要な部分であると信じたのです。この私はしかし、われわれが栄養を摂取するための原理は、われわれが思惟するための原理とは全面的に区別されることに気づいたので、靈魂という名称は、両方の意味にそれが解されているその場合は、両義的である、と言ったのです。かくてその名称が特に人間の第一の現実態、言うなら人間の主要な形相[を意味するもの]と解されるというためには、われわれがそれによって思惟するところの原理についてのみそれは知解されるべきでありまして、私は両義性を回避するために、たいていは精神という名称でもってそれを呼んできています。というのは、精神を靈魂の部分とではなくて、思惟するところの、その靈魂全体であると、私は見なしているからです。」⁽⁴⁷⁾

このようにデカルトは *anima* の両義性 栄養を摂取するための原理と思考するための原理 を避けて、思考するものをとくに *mens* と呼ぶことを好んだが、*mens* を、*anima* の部分ではなく、思考するところの *anima* 全体とみなしてもいる。かくて *mens*(*esprit*) と *anima*(*âme*) は同義語となる⁽⁴⁸⁾。

デカルトにおいて *mens* は、本来の意味の「実体」である「神」とは区別された被造物ではあるが、やはり「実体」である。デカルトによれば、「実体」は「存在するために他のいかなるものをも必要とすることなく存在しているもの」であり、この意味の「実体」として考えられるのは「神」だけであるが、「精神」と「物体」とは「存在するためには、ただ神の協力のみを必要とすればよい事物」であるがゆえに、いずれも「被造実体」として「実体という共通の概念のもとに」考えることができる⁽⁴⁹⁾。

ところで、ライブニッツが『知性新論』でコスト訳に倣って *esprit* と *âme* を使う場合、根底にはライブニッツ固有の発想があった。すなわち、*âme* は必ずしも人間の「魂」ではなく、人間の「魂」を指すのは「理性的魂(*âme raisonnable*)」であり、これは「精神(*esprit*)」と互換的に使われる⁽⁵⁰⁾。それに、ライブニッツにおいて *âme* も *esprit* も「実体」である。

しかし、ロックが *mind* と呼ぶ思考する能力は「実体」ではない。実体的魂には *soul* とか *spirit* が当てられる⁽⁵¹⁾。『知性論』では「実体」の自存性は「観念」の背後に色褪せている。ロックは「実体の観念」について次のように言う。「私たちは感覚によっても反省によってもこの観念をもたないし、また、もつことができないのである。(中略)この実体観念は他の観念が心にもたらされる仕方でもたらされないから、実体の明晰な観念はまったくなく、したがって、実体という言葉で私たちの意味表示するところは、私たちが自分の知る観念の基体ないし支持体とする何か分らないもの、すなわち特定判明な実定的観念のないある事物という不確実な想定だけなのである。」⁽⁵²⁾ロックにとって実体の観念は、「単純観念」すなわち *mind* が「感覚」ないし「反省」から受動的に受け取る観念ではなく、「複合観念」である。つまり、単純諸観念によって *mind* が作り上げる観念である。一定数の単純諸観念がたえずまとまりをもっていることに気づけば、*mind* はその単純観念群をある名称で指し示す。諸観念がどうしてそれ自体で存続したり恒常的關係に従ってまとまりうるのかが分らな

ければ、mind は自分が作り出した名称の背後に、諸観念がそこにおいて存続しそこから結果する何らかの「基体 (substratum)」を想定するよう習慣づけられる。ロックによれば、われわれはそういう基体を「実体」と呼ぶのである⁵³⁾。

ロックの考える「実体」は、「物体 (body)」、「有限なる精神 (finite spirit)」、「神 (God)」の三つである⁵⁴⁾。「物体」は、ロックによれば、「私たちの感官を触発する多くの可感的性質の存立する基になるある事物」である。また、思考すること、推理すること、恐れることなどの mind の作用は、それ自身で存立すると断定されることもなく、それが「どのようにして物体に属したり物体によって生み出されたりできるか」を理解されることもないので、われわれはこの mind の作用を「精神 (spirit) と呼ばれるある別の実体の活動」だと考えがちである。つまり、「精神」とは「思考すること、知ること、疑うこと及び運動する力能などが存立する基となる実体」として「想定」されたものにすぎない⁵⁵⁾。そして「神」もまた一つの「複合観念」にすぎず⁵⁶⁾、われわれはあくまで「反省」から得る「単純観念」の一つ一つを「無限性 (infinity)」という観念によって拡大し、それらを結合することによって「至高の存在者 (Supreme Being)」としての「神」という「複合観念」を作るのである⁵⁷⁾。mind の「さまようあの大きな領域のどこでも」、mind を「天翔けさすと思われるあのはるかな思索でも」、mind は「観想するように感官あるいは反省が呈示した観念をいささかなりとも出ない」⁵⁸⁾。ロックの実体批判はこの点に帰着する。

先に述べたように mind は「実体」ではないが、だからといってロックは「実体」の存在そのものを否定しているわけではない。むしろ「物質的実体 (material substance)」ないし「物的実体 (corporeal substance)」および「精神的実体 (spiritual substance)」の存在を素朴に前提し、その前提に立って自己の観念理論を組み立てている。それらの「実体」は在るには在るのだが、どのようなものであるのか詳しくはわれわれには未知であり、われわれは高々、「物体の固形的部分の大きさ、形、数、位置、運動または静止」⁵⁹⁾といった「第一性質 (primary qualities)」の「観念」にまで至るにすぎず、そこから先はわれわれの理解力を超えている、というのがロックの立場である。ロックが「実体」の非存在を断言してはいないところに、その観念理論の曖昧さあるいは不徹底を見て取ることもできるかもしれないが、ロックは、デカルトの二つの有限実体、すなわち「物体」と「精神」を日常的な個々の意識の内部における「感覚」と「反省」に解体したのであり、その限り、ロックの観念理論はまぎれもなく脱デカルトの方向性を孕んでいた。

ロックは thinking thing というデカルト的表現を執拗に使うけれども、それは、実体論的立場から非実体的な mind とその「作用 (operations)」の立場への移行を行なうためであった⁶⁰⁾。ロックは、デカルトに対して思考の実体化を批判した最初の責任者である⁶¹⁾。そうした脱デカルトの方向性をもつ mind をコストが âme もしくは esprit と仏訳したとき、一種の意味変容が生じ、ライプニッツはいわば《デカルト化》されたロック哲学と相対したのではないか。

上記のフィラレートの発言について少し付言すれば、この発言に対してライプニッツの代弁者テオフィルは、「私が感覚の幻影に対立させている純粹経験と、事実の真理に対立させている必然的真理つまり理性の真理に関しては、異存ありません。」⁶²⁾と応えるのだが、ここでは一種のずれが生じている。ロックは、生得原理の基準を「普遍的同意」に求める学説を批判する文脈で、生得説に即して論理を展開してみせているにすぎず、自分自身の説を積極的に主張しているわけではないのに、その発言をライプニッツ (テオフィル) はや、強引に自説につなげているからである。「合理的な命題や精神が合理的とみなしうる命題」は、『知性論』では、真 (true) である命題や mind が同意できる命題⁶³⁾、と表現されており、コストはこの部分を、真 (véritable) である命題や esprit が真とみなしうる命題⁶⁴⁾、と訳している。コスト訳ですでに変更が生じているが、ライプニッツはさらに変更して、véritable を raisonnable とする。テオフィルは先の発言のあと、「算術全体と幾何学全体」は生得的であり、「精神」は「必然的真理」を自分自身の奥底から引き出せると主張している⁶⁵⁾。ライプニッツによる変更は、この主張を導くためではなかったか。

4. 結 び

このように、ライプニッツはコスト訳をあるいは踏襲し、あるいはコスト訳を変更して独自の語句を使う。『知性論』の英語の語句をコストが仏訳した段階で、意味が不可避的にずれてしまっている場合があり、その語句を、ドイツ語を母語とするライプニッツが読むわけである。

『知性論』という長い著作が英語で書かれていたことは、ライプニッツにとって一つの障害だったようであり、ライプニッツは自分のフランス語の力が不十分であることを認めた書簡で、英語を習得する機会に恵まれなかったことも述懐している⁽⁶⁶⁾。ライプニッツが『知性論』全体を英語で読んだかどうか、そうであったとしてどの程度まで読み込んだかについては分らない。『知性新論』の執筆過程で、ライプニッツはおそらく『知性論』の英語版にはあまり頼りなかつたであろうと推測される。というのも、『知性新論』の英訳者も指摘するように、コスト訳がロック自身の言説からずれている場合、ライプニッツもたいていそれに倣っているからである⁽⁶⁷⁾。ライプニッツが『知性論』の英語版をきちんと読んでいれば、そうしたずれは修正できたはずである。

いずれにしても、コスト訳によってロック哲学はライプニッツには以前にもまして身近なものになったであろうが、思想伝達と他者理解に何らかの偏りが生じたとしても不思議ではない。しかしながら、コスト訳を媒介とした思想伝達と他者理解にバイアスがあるにしても、否むしろバイアスがあるからこそ、近代西欧哲学の根幹に関わる豊かな問題群が『知性新論』に胚胎したと言えるのではないか。ライプニッツが精髓を挙げて試みたロック哲学との想像上の対話『知性新論』は、今日のわれわれが再考すべき問題を幾重にも孕んだ書である。

注

- (1) ゲルハルト版哲学著作集第3巻 (*Die philosophischen Schriften von Gottfried Wilhelm Leibniz* herausgegeben von C.I. Gerhardt, VII Bde. Berlin 1875-1890; Nachdruck Hildesheim 1965. III) 392頁。以下、この著作集はGPと略記。
- (2) Cf. John Hampton, *Les Traductions françaises de Locke au XVIII^e siècle*, *Revue de Littérature comparée*, 29, Paris 1955; Gabriel Bonno, *Locke et son traducteur français Pierre Coste: Avec huit lettres inédites de Coste à Locke*, *Revue de Littérature comparée*, 33, Paris 1959.
- (3) *The Correspondence of John Locke*, ed. by E.S. De Beer, Vol. 5, Oxford 1979, p.395.
- (4) 『ヨーロッパ精神の危機』、野沢協訳、83頁。
- (5) GP III, 336-375.
- (6) GP III, 391-399.
- (7) ロックは1675年から79年まで4年間、フランスに滞在し、フランス語を学ぶ機会を得た。ロックは、コスト訳の序文に収められた版元宛の手紙で、「コスト氏はこのフランス語訳をあなたに送る前に隔々まで読んでくれましたし、私の見解から隔たりがあると気づいた箇所はすべて原典の意味するところに引き戻してあります」と述べている。
- (8) このことはコンディヤック自身が以下の箇所述べている。『人間認識起源論』、第1部第5章§14、第2部第1章§155原注(古茂田宏訳、岩波文庫上、227頁、同文庫下、195頁)。なお、『人間認識起源論』に見られる『知性論』からの引用がコスト訳に依拠したものである点については、同文庫上、253頁(訳注1)参照。
- (9) *Essai philosophique concernant l'entendement humain par M.Locke, traduit de l'anglois par M. Coste, cinquième édition revue et corrigée*, Amsterdam et Leibzig 1755, Epître dédicatoire au Duc de Sheffield, p.2(édité par Emilienne Naert, Paris 1983)。
- (10) 『ヨーロッパとは何か』、松村剛訳、平凡社、110頁。
- (11) 工作舎刊、ライプニッツ著作集第4巻、53頁、訳注17参照。
- (12) Hampton, op.cit., p. 242.
- (13) Catherine Glyn Davies, *Conscience as consciousness: the idea of self-awareness in French philosophical writings from Descartes to Diderot*, Oxford 1990, pp. 27-28.
- (14) *Essai philosophique concernant l'entendement humain*, Traduit de l'Anglois de Mr.Locke, par Pierre Coste, Sur la Quatrième Edition, revue, corrigée, & augmentée par l'Auteur, Amsterdam 1700, p. 404.

- (15) Malebranche, *Œuvres* I (la Bibliothèque de la Pléiade), De la recherche de la vérité, Texte établi, présenté et annoté par Geneviève Rodis-Lewis, Dijon 1979, p. 347. マルブランシュは「事物を見る四つの仕方」を次のように考えている。「第一は、事物をそれ自体によって認識することである。第二は、事物をその観念によって認識すること、つまり(中略)事物とは異なる何かによって認識することである。第三は、事物を意識によって、すなわち内的感覚によって認識することである。第四は、事物を推測によって認識することである。」(*Œuvres* I, p. 347)そしてマルブランシュによれば、「意識」ないし「内的感覚」による事物の認識は、完全性という点では、事物をそれ自体によって認識することや「観念」によって認識することよりも下位にあり、「われわれが意識によって自分の魂についても認識が不完全であるのは確かであるが、しかしこの認識は虚偽ではない」(*Œuvres* I, p. 351)。
- (16) *The Works of John Locke*, 10 vols, London 1823; Nachdruck Aalen 1963, vol. 9, p. 245.
- (17) *Essai philosophique concernant l'entendement humain* [1700] p. 404.
- (18) Davies, op. cit., p. 31.
- (19) John Locke, *An Essay concerning Human Understanding*, edited with an Introduction by Peter Nidditch, Oxford 1975, p. 115.
- (20) Marc Parmentier, *Introduction à l'Essai sur l'entendement humain de Locke*, Paris 1999, pp. 270-271. コストが第2部27章以前に訳語の conscience を用いていないという事情は、仏訳第5版でも変りはない。初版とは異なり、第5版では訳語選択の根拠をマルブランシュの用例 (conscience = sentiment intérieur [『真理の探求』第3巻2部7章I]) に求めているにもかかわらずである。コストのためらいは、ひとつには、ロックのconsciousnessとマルブランシュのconscienceないしsentiment intérieurとの概念的相違そのものに起因するのではないか (Cf. Parmentier, op.cit., pp. 271-272)。
- (21) Davies, op.cit., p. 25.
- (22) Davies, op.cit., pp. 11-12.
- (23) E. J. エイトン『ライプニッツの普遍計画』、渡辺正雄・原純夫・佐柳文男訳、工作舎、227-230頁参照。ライプニッツがローマでこの写しを見たのはおそらく1689年のことだろうと推定される (Davies, op. cit., p. 40)。ライプニッツは、雇い主であるブラウンシュヴァイク家の歴史を書くための資料を求めて、オーストリアとイタリアに旅行しており、ローマ到着は1689年4月14日、ローマを離れたのは同年11月後半であった。ライプニッツがカドワースの娘ダマリス・マシャム夫人宛にしたためた書簡に、「私はこの著作を初めてローマで見ました。高名なフランスの数学者オズー氏がかの地へそれを持ってきていたのです。」(GP III, 336) という文面が見出される。因みに、ライプニッツがマシャム夫人から『知的体系』を贈られたのは1704年の初頭のことである。
- (24) Davies, op. cit., p. 47.
- (25) Davies, op. cit., p. 48.
- (26) Ralph Cudworth, *The true intellectual system of the universe*, with a new Introduction by G.A. Rogers (A reprint, in three volumes, of the 1845 Edition) Vol. 1, Introduction, vii—viii.
- (27) 新井明・鎌井敏和編『信仰と理性 ケンブリッジ・プラトン学派研究序説』、お茶の水書房、117頁参照。
- (28) *The true intellectual system*, Vol. 1, p. 244.
- (29) OED はcon-senseの意味を《joint-sense (equivalent to consciousness)》と説明し、用例として、先に引用した『知的体系』第3章37節15の同じ部分を挙げている。
- (30) Davies, op. cit., pp. 42f.
- (31) *Identité et différence*, le chapitre II, XXVII, Of Identity and Diversity de l' *Essay concerning Human Understanding*, L'invention de la conscience, présentation, traduction et commentaire, par É. Balibar, Paris 1998, p. 27. 1687年10月9日付アルノー宛書簡(工作舎刊、ライプニッツ著作集第5巻、358頁、382頁)参照。
- (32) GP II, 112.
- (33) GP II, 121.
- (34) アカデミー版ライプニッツ全集第6部門第6巻 (Gottfried Wilhelm Leibniz, *Sämtliche Schriften und Briefe*, Sechste Reihe Philosophische Schriften Sechster Band Nouveaux Essais. Herausgegeben von der Leibniz —Forschungsstelle der Universität Münster. Bearbeiter: André Robinet, Heinrich Schepers. Berlin 1962.) 235頁。以下、この巻はA VI- 6 と略記。
- (35) Davies, op. cit., p. 50.
- (36) A VI-6, Introduction; Davies, op. cit., p. 49.
- (37) Davies, op. cit., pp. 11-12.

- (38) A VI-6, 65, 235ff, 242.
- (39) A VI-6, 245.
- (40) 因みに、conscience の同義語として使われている apperception もライプニッツの造語である。これはコストが perceive を翻訳するために用いた s'appercevoir という動詞から作られたものと思われるが、ヴィニョルはこの造語にも難色を示し、perception と直した。しかしライプニッツは、consciosité の場合と同様、自分の用語法を譲らなかった。ライプニッツが『知性新論』で使っている apperception と conscience については、ライプニッツ著作集第 4 巻、序文の訳注33および第 2 部の訳注355参照。
- (41) この思想的交錯の分析については、岡部英男氏の作成による「意識」に関する訳注(ライプニッツ著作集第 4 巻、282-283頁)から少なからず示唆を得た。
- (42) ライプニッツ著作集第 4 巻、65頁。A VI-6, 77. Cf. Nidditch, p. 50.
- (43) Cf. Balibar, op. cit., p. 220.
- (44) John W. Yolton, *A Locke Dictionary*, Cambridge 1993, p. 137.
- (45) Pierre Richelet, *Dictionnaire François, contenant les mots et les choses, plusieurs nouvelles remarques sur la langue Française*, Genève 1680; réimp. Hildesheim 1973, p.27, p. 302.
- (46) Antoine Furtière, *Dictionnaire universelle contenant généralement tous les mots François, tant vieux que modernes, et les termes de toutes les sciences et des arts*, La Haye-Rotterdam 1690; réimp. Kyoto 1987. *Le Dictionnaire de l'Académie Française*, Paris 1694; réimp. Tokyo 1967.
- (47) 白水社刊、増補版デカルト著作集 2、431-432頁(『省察』、「第五答弁」)参照。
- (48) この点については、谷川多佳子『デカルト研究 理性の境界と周縁』(岩波書店、1995年) 143-144頁参照。
- (49) 増補版デカルト著作集 3、60-61頁(『哲学原理』第 1 部51-52)。
- (50) たとえば、『実体の本性と実体相互の交渉ならびに魂と身体との結合についての新説』(ライプニッツ著作集第 8 巻、71頁)参照。
- (51) Cf. Balibar, op. cit., p. 41.
- (52) 大槻春彦訳、岩波文庫版(-)、119頁。ライプニッツ著作集第 4 巻、104-5 頁参照。なお、『人間知性論』からの引用に際しては、原則として大槻訳に依拠したが、Nidditch 版のテキストに基づいて若干訳し変えた部分があることをお断りしておく。
- (53) 『人間知性論』第 2 部23章参照。
- (54) 『人間知性論』第 2 部13章18節。
- (55) 『人間知性論』第 2 部23章 5 節。
- (56) 『人間知性論』第 2 部23章33節。
- (57) 同上。
- (58) 『人間知性論』第 2 部 1 章24節。
- (59) 『人間知性論』第 2 部 8 章23節。
- (60) Cf. Balibar, op. cit., p. 220.
- (61) ibid.
- (62) ライプニッツ著作集第 4 巻、65頁。
- (63) 大槻訳(-)、44頁。Nidditch, p. 50.
- (64) *Essai philosophique concernant l'entendement humain*, p.12.
- (65) ライプニッツ著作集第 4 巻、65-66頁。
- (66) 1696年 7 月27日付、トマス・パーネット宛書簡: GP III, 181.
- (67) G.W. Leibniz, *New Essays on Human Understanding*, translated & edited by Peter Remnant & Jonathan Bennett, Cambridge 1981, Introduction, xii.